

函館児童英語研究会

「どうする小学校英語」研修会に参加して

せたな町立若松小学校

教頭 佐々木 朗

1. 日時 平成22年10月31日(日) 9:00~15:30

2. 場所 函館大学

3. 講師 近畿大学准教授 田邊 義隆先生

ピアソンロングマン 竹村先生

4. 内容

「外国語活動必修化に供えた要点整理」田邊先生

(1) 外国語活動の目標を再確認)

- ①言語や文化について体験的に理解を深めること。
- ②積極的にコミュニケーションを歯古老とする態度を育成すること。
- ③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと。

(2)円滑なティームティーチングの実現に向けて

・学級担任に求められる対策

学年団の結束

授業の設計、実施評価の各段階における役割を知る

外部指導者と目標・目的を共有する

活動案作成(=授業設計)力の向上

打合せと反省の観点を絞る

外部指導者との関係作り

「プレゼンの授業」の進め 竹村先生

国連奈民高等弁務官緒方貞子さんの活動を通して

5. 感想とまとめ

いよいよ平成23年度から小学校の外国語活動が必修化となる。私自身今年度は「挑戦」という意味で、週一時間の授業時間をいただき、昔取った杵柄とノウハウをどれだけ生かしていけるか、試行錯誤の授業の日々である。中学校で8年間英語というものにつきあってきて、英語の楽しさを教えるということも様々試みた。と同時にいつも頭の中にあるのは高校の入選である。英作文、日本語訳、そして文法などに力を入れざるをえなかった自分があった。子どもたちに力をつけるために、英文の暗唱、ミニテストなどを行い、基礎をつけることにがんばった時代であった。それでも一年生の一学期の定期考査の90点近

くの平均をピークにその後は二極化してしまっていた。好きでがんばって勉強をする子とそうでない子である。当時勤めていた中学校は、地元の高校へ進学する生徒と都市部の高校をめざす生徒に分かれてしまい、どうしても前者の生徒たちは、どの教科も勉強に力が入らなかったという現実もあった。英語が不得意だった生徒にとっては週4時間の英語の時間はつらかったところはあると思う。私が転勤して初めて持った中学校3年生の英語の授業は、教科書を読みこなす一部の生徒と、大文字、小文字がやっという生徒たちであった。ミニテストでも1問か2問の正解であった。それでも繰り返し繰り返し指導をして、少しではあるが、単語とその意味がわかるようになってきた。なかなか復習しない子どもたちであったが、ミニテストでは、次の日の答えと共に問題を配り、何をどう勉強したらいいのかを与えて勉強させた。どうすれば英語嫌いを作らないかが自分の大きな課題であった。

中学校での8年間を終え、再び小学校に戻った。10年少し前のことである。そこ頃、英語が必修化になるとは夢にも思わなかったが、その頃から、小学校においても英語指導助手が入り出した。英語教師の端くれということもあり、ALTの小学校での導入では、積極的に手を挙げ、授業を行った。そこで私が大切にしたのは、2つである。一つは、「英語は楽しいものだ」ということを子どもたちに伝えること。ほんの少しでもいい、ちょっとした英語が通じるという喜びを味わってほしいということである。もう一つは、国際理解の観点である。話す言葉が違って、目の色が違って、食べ物や文化が違って、みんな同じ人間であり、気持ちが通じ合えることである。

さて、私の英語についての基本的な考え方であるが、英語はツール（道具）だと思っている。これから間違いなく国際社会が発展していく。その上で、世界で一番通じやすい言葉は間違いなく英語であろう。だから、英語で何とかコミュニケーションを取ることができるとことは大切であると考え。「何とか」と書いたが、何とかで十分だと思う。自分自身、あまり英会話は得意ではない。でも何とかなるものである。その「何とかなる」という自信みたいなものを最低中学校を卒業するまでに身につけてほしいと思っている。もう一つは、英語の読みである。今やインターネットの時代である。横文字のホームページにもアクセスする必要がある。和訳サイトもあるが、私は、斜め読み程度でいいので、英語で書かれてあるホームページが何のことが書かれているのか、おおよそどんなことが書かれているのかぐらいはわかる英語力を持ってほしいと願っている。

「英語は使わないと確実に衰える。」実感である。だから生涯教育の一つとして、ずっとどこかで英語にふれるということは大切に子どもたちを育てることが大切だと思う。それゆえ、英語ぎらいは作らない。特に小学校においては、と思うのである。

ということで、今年英語を指導することに携わって、できるだけ道具を持って、楽しく活動することを第一に考えている。そして、国際社会に生きる、英語が通じるということから、できるだけ多くの回数チノウ先生や松林先生にも来ていただき、英語をしゃべるという活動も取り入れている。めまぐるしいほど仕事がある中ではあり、月曜日の英語の授

業に向けて、プランを立て、教材を考え、作るのはゆるくないが、どこかで自分の楽しみでもあるというように自分自身感じている。

田邊先生のお話の冒頭に、子どもたちの「国語」の力を育てるため教師が大切にしなければならないことはどんなことかという質問があり、グループで話し合った。子どもの言語能力の発達について知ること、教材研究、広く豊かな教養、使命感、愛情などが挙げられた。そして順番をつけるとしたらという質問に移り、それぞれ意見が交わされた。私は国語においては、教材研究の力を挙げた。そして次、これを「英語」に変えたらどうであろうか。一番大切なものに、英語の教養が来たとしたら、多くの小学校教員は「やっていけない。」ということになるのではないだろうか。

以前何かのレポートで書いたと思うが、英語を専門としない小学校教員は子どもたちに「英語を教えてやろう。」というのではなく、「子どもたちと一緒に英語を楽しもう。」というスタンスが大切だということを知った。さらに、英語を専門とする教員（小学校で英語の免許所有者はおよそ3%）に指導された学級の子どもには、英語嫌が多いというショッキングなデータもある。どうしても教え込もうとすることが、子どもの英語嫌を作ってしまうようだ。

それと同時に大切にしなければならないのが、研修であると考えている。プロの教員として、「小学校英語活動」の目標、活動内容、具体的な授業場面などについてのノウハウを学ぶことを避けてはいけないと思う。幸いに、今は情報化社会である。授業ビデオなどもネットを探せばゴロゴロしているし、それぞれの職場においても多数の資料が届いている。でも、私自身一番勉強になるなあと思うのは、外に出て研修会なり、勉強会に参加してみることだと思う。今回の研修でも、『英語ノート』ってこんな使い方もあるんだ。」「こんなゲームがあるんだ。」などと新しい発見ができた。

今回の授業でおもしろかったのは、世界のハンバーガーについてであった。英語ノートの「行ってみたい国を紹介しよう」という単元で、世界のマクドナルドのハンバーガーを出し、それがどこの国のものであるか子どもたちに予想させるものである。インドでは、肉の入っていないハンバーガーがあり、文化の違いを話す題材にもなる。また、見かけない文字からアラブ系の国を探すなど、子どもたちの興味関心をくすぐるような題材であった。

また、午後からの竹村先生の講義で、トランプの活用についての話もよかった。グループ分けをするときには、模様や数字を使うと有効にできること。仲良しグループは、活動は早く終わるが、おしゃべりになってしまいがちであることなどがあり、できるだけランダムな構成にした方が深まりがあるということを知った。事実、トランプでその日の参加者がくみ分けされたが、教員あり、民間の英語指導者あり、結構話せる仲になって良かった。

また、緒方貞子のプレゼンの授業では、パワーポイントを使い、国連難民高等弁務官として10年もの間活躍した彼女の軌跡をおいながら、キーとなる英語を学習していくこと。

教え過ぎないで、子どもたちの思考を待つことなどの教え方のキーポイントを学んだ。

前日の研修旅行に続いての函館行きということで、ちょっと疲れもあったが、全然眠くもならず、楽しい研修であった。今回またちょっと自分の引き出しを増やすことができたので、また、授業で生かしていきたい。